

マイヤーズ問題

近代スピリチュアリズムと心霊研究の間で

津 城 寛 文

はじめに

死すべき人間の死後の生命、不死性は、神話や哲学、神学や文芸、また民間信仰の中で古来より語られてきている。19世紀半ば、まるで蒸気機関車のような唯物論と正面衝突するかのようになり、人間の靈魂の死後存続という主張が事新しく打ち出され、近代スピリチュアリズムと呼ばれた。これによって死後生という主題は、一部の人々にとって近代知の反省の対象となった。

カントとショーペンハウアーに、「視霊」をタイトルに含む小さな著作があることは、エピソードとしてはよく知られている。どちらも、自説を応用したいわば時事評論であり、研究書の中でときおりエピソード的に言及されることはあっても、内容自体が主題とされることは少ない。実はこれらは、死後の生命、人間の霊としての存在、死者の幻姿出現などを主題とした論説であり、とらえ方によっては、心霊研究（とその批判）を先取りする議論から成り立っている。

近代スピリチュアリズムは、人間の死後存続というある意味でユニバーサルな信仰を中心にすえた近代的信条であったが、その事実問題を（自然）科学的に探求しようとしたのが心霊研究である。両者にかかわる問題を、心霊研究を代表する人物で、かつ死後存続説に最も近い位置にいたフレデリック・マイヤーズ（1843～1901）を接点として、検討してみたい。

1. 二つの視霊論

カントとショーペンハウアーの視霊論を、それぞれの哲学の一環として扱うのは容易でないが、体系を離れたいわば匿名のエッセイとしてなら、素人にも拾い読みが許されそうである。「マイヤーズ問題」への足がかりとして、字面の断片だけでもなぞっておこう。

カントの視霊論 = スウェーデンボルグ論 『形而上学の夢によって解釈された

『視霊者の夢』(1766)は、揶揄的とも防衛的とも、擁護的とも攻撃的とも評されるように、一方にはスウェーデンボルグ思想の祖述のような部分があり、他方にはそれに対する認識論的批判があり、最後は、哲学的問題としてのプライオリティが低いという理由で、視霊論にはこれ以上関わらないという絶縁宣言で締めくくられている。

スウェーデンボルグ的な思想は、「霊界との連帯を開くための隠秘哲学の断片」と題された第2章にまとめられている。「確証があるわけではないけれども、決して不愉快ではないようなもろもろの憶測をたくましくさせてくれる試みを……紹介する」という一節などが、この話題に対するポジティブな関心を表わしており、つぎのように述べられる。

「非物質的世界は それ自身で存在している全体であり、各部分は、物質などの仲介が全くなくともいずれも相互に結びつき、共同体をなしている」
「人間の魂は、すでに現世においても此岸、彼岸の二つの世界を同時に結合したものと見なさなければなるまい。人間の魂は肉体と個人的に結びついている限りでは、物質界だけをはっきりと感じている。これに反し、霊界の一員としては人間の魂は霊的存在のもろもろの純粋な影響を感じとり、逆にこちらからも霊界に影響を与える」

そして「霊の表象」については、「形而上学的な仮説は、異常なほど柔軟」という断り書きつきで、スウェーデンボルグが語るような「霊」の「さまざまなイメージや表象」「その象徴である類似の表象」は、霊の概念そのものに「いわば物質的な衣装をきせる」ことで起こる随伴現象であること、こうした「本人の外部にあるような様子を示す」「霊の表象」を生じるのは、外的感覚の器官ではなく「魂の意識」といわれるものであること、それは「あらゆる感覚を襲う」「錯覚」「幻想」であること、などの原則を述べている。したがって認識論的には、異常なほど柔軟な形而上学的仮説を離れれば、「霊あるいは魂は非物質であり、肉体的感覚にとっては存在しない」「わたしが霊として考えていることは、人間としてのわたしによって想起されることではない」「広さの限界が形姿を決定する。したがって霊的存在の形姿などは考えられない」と、^(注1)ネガティブに批判せざるを得なくなる。

これに対して、ショーペンハウアーの『視霊とこれに関連するものについての研究』(1851)は、「今日では動物磁気ならびに透視が明白な事実であることを疑う者は、単に信仰がないばかりでなく、無知であるといわれる」という

一文によって方向づけられ、事実(事件)としての視霊現象をどう説明するかが課題になっている。カントが価値の低いものとして退けた主題が、ここで逆に前景化しているのは、ショーペンハウアーにとってこの問題のプライオリティが高いからである。内容的には、「心霊現象の説明は、動物磁気によって新しい道が開かれてきた」という一節が示唆するように、心霊研究そのものを先取りする設問、仮説が多い。かりに筆者の関心からまとめると、視霊その他の事件としての事実問題、「夢の器官」、意志の働き、死後、の四つほどのテーマを取り出すことができる。

まず、現象としての事実問題については、「ひんぱんに、しかも現実に見られる死者の像」は、「外界の現象」と同じく、経験に裏づけられた知識であり、そこに示されるのは同じ「意志」であって、「物自体が背後にあることを証明」している、というように、「明白な事実」云々の主張が繰り返される。

つぎに、「夢の器官」については、「普通の覚醒時とはまったくちがった器官」、「空間と時間の関係に制約されず、そのかぎりでは全知である反面、普通の意識にはあらわれず、われわれにはヴェールで隠されている」認識能力であり、それによって「客観的に示される直感」を、意志は「頭脳による認識に告げ知らせる」ことができる、これが「幻像の起源」であるといわれる。

三つめに、意志、人間の内的本質(=霊)については、「物自体、したがって人間の内的本質」である「人間の意志」は、「個人をそれぞれ分離する『個体化の原理』(時間ならびに空間)の外部」にあり、「制限は意志にとって存在しない」ので、「物自体にもとづいた交流」は、「意志の催眠的な作用」によって、「他人の意志」の空間的直覚である「他人の生体にも作用を及ぼす」ことができる。「動物磁気」とは、われわれの意志がこのようにして「他者」に働きかけることであるとされる。

四つめの死後については、「魔術的作用は死後も効果をあらわす」「死んだ人をいわば現実に出現させるばかりか、その死人にも反作用を及ぼす」と主張される。なぜなら、「物自体であるかぎりにおいて意志が死によって崩壊し破滅しないことは、はっきりしている」からである。

こうした「実践的形而上学」「実験的形而上学」を踏まえた上で、しかし「視霊」その他の「魔術的作用」の発現が、現実問題としては「きわめて困難」であることが指摘される。それは、「死んでもそこなわれないで残る人間の内的本質」は「時間および空間の外に存在する」が、その場合「死者」から「生

存者」への作用は、「きわめて多くの仲介物をつうじて」行なわれざるを得ないからである。このような仲介作用について、微に入り細をうがった思考実験が、最後の数ページにわたって延々と出てくる。関心のない人が読めば辟易するような文章を、一旦ほぐしてつなぎあわせれば、つぎのようになるだろう。

まず、「死者による客観的作用」があり得るとすれば、「幽霊現象」などは「死者の意志」が「魔術的な力」によって「他人の生体に働きかけ」、「知覚する主観の直感形式のなかに」入り込み、「感官への外的作用の結果生ずるであろうような形像を見させる」ことによって起るであろう。つぎに、「目撃者」は自分の体験について、「外的感官の知覚のように語る」が、こうした「内的作用の結果生じた知覚を単なる空想の産物と区別する」のは困難であろう。さらに、視霊の報告を尊重すれば、「こうした作用が人間の生体に限定されずに生命のない無機物にも及び、これらを動かすことすらけっして不可能ではない」^(注2) 等々。

実は以上のようにまとめたのは、マイヤーズらの議論をあらかじめ念頭においてのことである。これをみれば、すでにショーペンハウアーの視霊論において、マイヤーズらと同じ問題が、実践的・実験的形而上学として論じられていたのがわかる。このような主題を、カントらの認識批判にならって退けるか、ショーペンハウアーらの実践的形而上学にならって追求してみるかは、人それぞれのプライオリティのおき方に拠るだろう。

2. 「マイヤーズ問題」という主題

フレデリック・マイヤーズは、『生者の幻影』(1886)という共著、とくに『人間個性とその死後存続』(1903)という遺稿によって、心霊研究史において名の通った人物の筆頭である。^(注3) 一般的な知名度は低いが、「サブリミナル・セルフ」という用語の提案、とくに「テレパシー」という(超)心理学用語の発案だけでも、学説史上マイヤーズは無視できないと評される。網羅的な近代精神医学史を描いた、アンリ・エレンベルガーの大著『無意識の発見』は、記述としては短いものながら、随所でマイヤーズに言及し、大きな見取り図の中にマイヤーズを位置づけ、高く評価している。たとえば、メスメリズムが拡散したあと、力動精神医学の成立に大きなインパクトを与えた事件として「特に重要」だったのは、「心霊術(スピリティズム=スピリチュアリズム)の到来」であり、心霊現象が「無意識を探究する方法の一つ」を提供したと述べられて

いるが、その心霊研究の中心者、代表者の一人がマイヤーズに他ならない。マイヤーズその人については、「用心深い研究者」「死後の生存の仮説と死者の霊とのコミュニケーションの仮説を承認していた」「無意識心性概念の偉大な体系家のひとり」とコメントし、また1903年の特筆すべき三点の出版物の一つに、マイヤーズの『人間個性とその死後存続』をあげるなど、その重要な位置づけは、一般的な知名度のある重要人物たちに匹敵する。^(注4)

著名な思想家によるまとまった評価としては、W・ジェームズがマイヤーズ没後に『心霊研究協会会報』PSPRに寄せた追悼文と書評がある。「マイヤーズ(の)問題」とは、そこでジェームズが敬意をこめて命名したものであり、マイヤーズ説が多岐に渡るのに応じて、ジェームズはいくつもの論点を主題化している。ここでは三点に注目する。

まず一つめに、人格の潜在的領域を確定するさまざまな試みの中で、マイヤーズは「サブリミナル」というタームの採用を提案し、多種多様な心の現象(意識の溶解から、催眠術、メスメリズム、透視、霊媒、悪霊憑依、幽霊屋敷、等々まで)を、「整理」「定式化」「一般化」し、「一つの体系にまとめあげ」「明確な地図」を提示した。これにより、「サブリミナルの正確な仕組みは何か?」というのが、今後われわれの科学が「マイヤーズの問題」として考えるに値する問題」になったという。二つめに、マイヤーズにおいてこのサブリミナル領域は、ネガティブなものだけではなく、「進化的」「卓越的」「超常的」なポジティブな働きを含む現象の基盤であり、「心の進化」というオリジナルな考えが、ラディカルに追求されていたことである。三つめに、しかしながらこの「心理学への偉大な貢献」は付随的なもので、マイヤーズの「最も大事な問題」は、「人間の不死性の証拠を追い求める」ことにあったとして、心理学への貢献を、「死後存続」探究の下に位置づけている。^(注5)

追悼文において述べられたこれらの点に加えて、『人間個性とその死後存続』の書評文では、マイヤーズの「霊界」仮説の孕む諸問題が、「核心的な点」として、つぎように指摘される。マイヤーズの主な関心は、「サブリミナル」の中の「上位」「進化的」「超常的」というべき領域の探究にあるが、このスーパーノーマルな領域はより広い「宇宙的」な環境へ連なっている。そしてその宇宙的環境は、論が進むにつれて、しだいに「霊的世界」の性格を帯びてきて、サブリミナル・セルフは、この霊的世界との交流から力を引き出し出てくるようにも説かれている。こう整理したあとでジェームズは、「ここまでのところ、

マイヤーズの理論は十分シンプルである。われわれの存在を、内的に無際限に拡張するだけでよい」と述べている。ジェームズが疑問を呈するのは、サブリミナル領域と宇宙的環境との関係について、マイヤーズの説明が曖昧なことである。つまり、宇宙的環境は「世界の究極の魂」のようなもので、「われわれのサブリミナルはそれと本質的に連続的である」と考えるべきなのか、あるいは、「さまざまなサブリミナルは非連続で、相互交渉は間隙の隔たりを超えて作用する」と考えるべきなのか、マイヤーズの説き方は曖昧である。しかし、「巻が進むにつれてマイヤーズの考えは後者に傾き、「霊的世界」は、相互に交流する「霊たちの世界」になる」という。しかもマイヤーズの説く宇宙的環境＝霊界は、ただ心的なだけではなく物質的でもあり、心理生理的なプロセスも含まれる。生きている人間の「魂の侵入力」は、相手の心の内だけではなく空間にも現われるし、死んだ人間の霊も空間に現われ得る。こう祖述した上でジェームズは、「こうしてわれわれは霊の死後存続の仮説に達する」とマイヤーズ説をまとめている。そして最後に、「マイヤーズの地図は、科学的に真剣になされた調査としては、これまでのところ唯一のものである」として、真剣に受け取られるべきことを強調している。^(注6)

ジェームズが指摘する「曖昧さ」は、死後存続の問題を論じるときだけの困難ではなく、霊を論じるときに特有の困難でもない。生/死を問わず、顕在/潜在を問わず、「個人」「人格」「精神」「意識」そのものの説明にまつわる、個人性/集合性、独立性/連続性、要素性/全体性、等々の難問である。

3. マイヤーズの問題設定

マイヤーズが活躍した時期、視霊その他の諸現象を説明する仮説としては、動物磁気説に替わって無意識説、第二人格説、等々があり、他方で大衆のスピリチュアリズムが主張する文字通りの死後存続説＝靈魂説があった。その中でマイヤーズが選択したこと、定式化したことを、筆者の関心に引きつけて、大雑把に祖述してみたい。いうまでもなく、もっと丁寧な扱いが必要であるが、まずはテキストの価値を確認することが第一歩である。本格的な研究者による本格的な作業はその後のことになるだろう。

遺稿『人間個性とその死後存続』の序論には、方法論上の重要な指摘が列挙されており、何が生き残るのかという疑問に関して、冒頭でつぎのように端的な問題提起がある。「人間のパーソナリティには、肉体の死後に生き残る何ら

かのエレメントが含まれているかという、人間にとって最も深刻な関心事に、近代科学の諸方法はこれまで適用されていない」、これは「奇妙な間隙あるいは排除」であり、「本書の目的　それはSPR（心霊研究協会）の当初からの目的でもあり、多くの証拠はそのために集められたのだが　は、科学と迷信の間のこの不自然な壁を壊すために、なすべきことをなすということである」と。これにつづいて、スピリチュアリズムと心霊研究の連続面／断絶面の両面が述べられる。一方で、心霊研究は近代スピリチュアリズムによる「観察に多くを負い、彼らの結論としばしば一致」していると確認される。しかし他方、「ほとんどすべての現象は死者の霊の活動のせい」だとするスピリチュアリストの無批判な立場に対しては、「私見では、大部分の現象は肉体をもった霊の活動のせい」である(注7)と批判される。

マイヤーズらは、「おそらく唯物論の頂点をなすと思われる」1873年に、「この問題は宗教や唯物論よりも徹底的に研究されるべきという信念」を固めたが、そこで採用されたのは、「手に触れ目に見える世界に関する現実の知識を作り上げてきた探究とまったく同じ、慎重で冷静で正確な方法」、つまり近代科学の方法であった。「この領域ではとりわけ、近代科学が求める、オープンで率直でまっすぐな方法以外は、信頼できない」からである。これによって到達した初期の「一つの決定的な点」は、スウェーデンボルグやメスメリストたちが示したこと、つまり「既知の感覚器官ではない作用によって、心から心へのコミュニケーションが起こる」というテレパシー仮説だった。その「証拠」とされる夥しい報告をまとめたのが、共著『生者の幻影』である。「生者の幻影」の記録は、そのまま「死に行く人」の幻影、さらには「死者の幻影」へとつらなるように思われ、たとえば「知覚者はその人の死を知らないで、それはただの記憶を思い浮かべただけではなく、肉体を離れた霊の継続的な活動のせいである」という解釈につながった。マイヤーズらが企図したのは、「この直接的で超感覚的なコミュニケーションの含意する諸点の射程はどこまで及ぶかを示すという課題」であり、「この発見によって人間の深い本質や、死後存続の可能性に画期的な光が当てられる」と期待された。(注8)

しかし当初の感激が落ち着き、「証拠の収集と分析」をすすめるうちに、「この方向で直接探究しても、肉体をもった霊の活動から、肉体を離れた霊の活動への一歩は、じっさいのところ唐突すぎる」といわざるを得なくなる。なぜなら、「肉体に宿ったパーソナリティの諸能力に関する研究報告」そのものが不

(40)マイヤーズ問題 - 近代スピリチュアリズムと心霊研究の間で - (津城)

十分だからであり、生きている人間に出来ることと出来ないことの基準がなければ、「墓の向こうから来た」と明確に主張している一群の顕現を、そのようなものであると安全に識別する」ことは困難だからである。死後存続問題を考えるためにも不可欠な、生きている人間のそのようなパーソナリティの定義に関して、マイヤーズは、「不可分の連続した存在」という常識的な見方に、実験心理学による新しい見方を対比させる。後者は、「エゴの統一性」は「身体の感覚を唯一の共通基盤として、不休に再起する一定量の状態の協調である」という考えである。その上で、「より包括的な意識、より深い働きが存在している。その大部分は地上に生存している間はただ潜在的なものとして留まるが、死という変化によって自由になったあとは、その充実した働きを再び主張することになる……この考え方は、これまではまったく神秘的なものと思われてきた。私はこれを科学的な基礎の上に移植する」と主張した。^(注9)

このセルフの多層性を前提として、マイヤーズは二つの枠組みを、つぎのように対峙させる。「テレパシーや透視」は「私たちの心の力が無限の延長をもつか、あるいは私たちの心よりも自由で束縛のない心の影響力がわれわれに作用しているか、どちらかを示唆する」というように、いわば「隠された力」派と「霊の实在」派の対峙である。このように、マイヤーズはそもそもの始まりから一貫して、「隠された力」派と「霊の实在」派とを併記する立場にあり、しかもマイヤーズにおいて、それらは相互に掘り崩すのではなく、むしろ強め合う。「ひとつの見方は、別の見方を支持するものとなる。……私たちは遠く隔たって、テレパシー的に互いに影響することができる。そしてもし、私たち肉体をもった霊が、すくなくとも明らかに肉体に依存することなしに、このように活動できるとすれば、肉体に依存しないで存在する霊があり、しかも同じようにして私たちに影響を与えるかもしれない、という仮定は強力なもの」だからである。^(注10) かくして、「隠された力」=「テレパシー」=超ESP説と、「霊の实在」=「死後存続」説との交錯、つまり核心的な「マイヤーズ問題」は、互いに強めつつ、あるいは互いを掘り崩しつつ、全巻にわたって繰り返し帰することになる。

死後存続説が、どれもテレパシー説で再解釈できること(逆も然り)は、すべての心霊研究者もその批判者も承知しているが、^(注11)マイヤーズがあえて死後存続説を採るにいたる背景には、実験や体験報告のリアリティの大きさがある。これは、「心霊侵入psychical invasion」という用語の提案に関しても、同様に

考慮されるべきファクターである。

「心霊侵入」説は、「睡眠」を扱う第4章で集中的に展開される。心霊侵入を強く示唆するものとしては、「夢とその覚め際、フィアンセの夢を見る、相手も同時刻、同じ情景を見、感じる」などという例がもちだされる。もちろんこれはテレパシー説でも説明可能なものであり、読者はテレパシーとの異同に疑問をいだかざるを得ないだろう。じっさい、心霊侵入説はつねにテレパシー説と重ねて提示されており、諸事例のうちでリアリティの強烈なものが心霊侵入と判断されたことがわかる。^(注12)

最も強調された部分としては、「心霊侵入」はじっさいに起こること、私たちが知っている空間と何らかの交渉をもった何らかの動きがじっさいに為されていること、何らかのプレゼンスが伝達されて、しかもそれが被侵入者に識別され、あるいはされないこと、遠く離れた場所の知覚が得られて、しかもそれが侵入者の記憶にあり、あるいはないこと、これらを私は堅く信じている」と述べる箇所がある。そう確信する基準は、「インテンシティの度合い」という目安である。^(注13) しかしこのようなリアリティやインテンシティは、伝聞では失われてしまう。

判断の当否はともかく、テレパシーと異なる「心霊侵入」のメカニズムは、どう説明されるのだろうか。睡眠中の母親が睡眠中の子供を心霊的に訪問した、たまたま感受性の強い人が部屋にいて、傍観者として、心霊侵入を目撃した、という事例について、マイヤーズはこれを強烈さの度合いの高い「心霊侵入」と判断するが、その説明の核心部はというと、つぎのように、きわめて漠然とした表現であった。

「彼女は自分の心の中に潜在していた思いにほぼ対応するイメージを、物理的にでもなく光学的にでもなく、何らかの知覚力をもった人々が、空間のその部分に識別できるように、空間のある部分を、^(注14)アクチュアルに変化させる」

「マイヤーズ問題」の中に並び立つ、「オルタナティヴ」な「ライバル仮説」であるテレパシー仮説と靈魂仮説は、さまざまに表現されている。端的な対話をいくつかあげておくと、「超常的力をもった第二人格 / 心霊主義的理論」「生者間のテレパシー的コミュニケーション / 死者からのコミュニケーション」^(注15)「秘密の（隠された）記憶 / 霊のコントロール」などが印象的である。こうした対話についてマイヤーズは、両者の考え方には、ある意味で大きな違いは

ないと断った上で、つぎのような興味深いことを述べている。

「もしも人間の思考が、その肉体から離れて機能すると考えてみるならば、たとえば私が二個のダイヤモンドに注意を固定し、それが何ヤードか離れた人の脳を変化させて、目の前に二個のダイヤモンドが浮いているように見させたとしよう。そのとき、彼の側では、それを肉体から離れた霊による「憑依」ととらえるのか、それともその前の地点（テレパシーのこと。引用者）で停止すべきなのか、明白にはわからない。また私の側では、私が霊的に訪問した地点で「旅行透視」をして、自分の幻影をその人に見せると解釈するのか、それともその前の地点で停止すべきなのか、これも明白にはわからない。人格の分離とそれに伴う霊的環境における活動、これが実際に観察された真実の幻姿出現の諸事実を、最も簡単にカバーする公式であろう」(下線原著イタリック)^(注16)

「マイヤーズ問題」とは、この最も簡単な「公式」をめぐる解釈のせめぎあいに他ならない。そこで起こるのは、透視やテレパシーなどの一次的所与と、空間的・感覚的な表象で説明しようとする図式的試みが、あるいは信仰上の実践的な含意の反省が、あるいは思考停止が、さもなければ曖昧主義への耽溺である。いずれにせよそこでは、「霊的現象と空間、時間、物質的世界との関係という、根本的な問題」^(注17)が立ちふさがる。

4. 死後存続という主題

マイヤーズ問題を反復するうちに、「外部から来るように見えるからといって、彼自身の心の隠れた層から出たものではない、という証明にはならない」という慎重な保留は、マイヤーズの中でつぎのように変わってくる。

「この本は、当初計画されていた慎重さと用心深いアプローチを超えて、予期に反した方向へ前進させられ、今ではこの主題のもっとも極端な支流に所属しているが、それはまったく証拠の力によるものである。……過去十年の間に、われわれの証拠は根本から方向転換してしまった。この本が最初に企画されたとき、最も多かったのは生きている人間同士の間のテレパシーの証拠で、つぎに多かったのは死者の幻影の証拠、そして最も少なかったのは、おそらく、死者の霊の憑依による人間有機体のコントロールの証拠だった。しかし最近はその比率が変わってきた」(下線引用者)^(注18)

これはつまり、死者の幻影や、死者の霊による憑依と解釈すべきと思われる

事例が増えたということであるが、たびたび注意を促しているように、質の強烈さ、圧倒的なリアリティが、その際の重要なファクターであった。マイヤーズは、パイパー夫人や、とくにステイントン・モーゼスとの交流によって、「今や私には、身元の特定できる死者の霊との通信の証拠、彼らの明らかなコントロールのもとに為される霊媒の発言や書記を通しての通信の証拠は、深刻な批判を超えて、確立されたと思われる」という確信を強めた。すでにこの段階で、マイヤーズ本人において「マイヤーズ問題」は問題外となっている。さらにマイヤーズは、死者の霊が生者の有機体をコントロールする可能性を超えて、「霊による何らかの影響力が、通常有機体の構造を通してではなく、この粗大な物質世界に働くことができるか」という問題について、これが「躓きの石となる」ことを認めながら、その可能性と重大性を主張した。理論的な根拠とされたのは、「生きている人間の霊が自らの有機体をコントロールすることを、われわれは知っている。同様に、肉体を離れた霊が、何らかの憑依の形をとって、生きている人間の有機体をコントロールするかもしれないこと、物質の生きている一部分、つまりトランス状態の霊媒の頭脳に直接影響を与えるかもしれないこと、こうしたことの可能な理由を、われわれは見ることになるだろう。であれば、霊的な作用者によって作られた何らかの影響が、おそらくは生きている人間からとられたある種のエネルギーを媒介として、生命のない物体に同様に働きかける、と仮定しても、何も矛盾はない」というものだった。また経験的・実験的な理由は、「事実、そのような効果が、ウィリアム・クルックス卿やカールトン・スピアー博士その他によって、とりわけD・D・ホームやステイントン・モーゼスの事例において、信頼に値するやり方で、観察され記録されている」というものだった。^(注19)

生者間のテレパシーは、ショーペンハウアーのレベルでも自明と考えられていた。人間の(ある部分、おそらく本質的な部分の)死後存続も、「人間」が物質だけでないとするれば、十分予想してよい。したがって死者から生者へのテレパシーは、「理論的には可能」となる。このスピリチュアリズムにおける前提にして結論は、心霊研究においては事実問題として検証すべき課題であったが、マイヤーズは研究上の「停止線」を認めて一時停止しつつ、それをスピリチュアリズム側に直ちに踏み超える。

さらにマイヤーズは、人間個性の死後存続、霊としての存在に関連して、「心理」と「物理」が交錯するという、「残された最重要な問題」に関心をもつ

た。つまり、幻影phantasm = 幻姿出現apparitionは、テレパシーにせよ霊の作用にせよ、心理的に説明がつくとしても、集団的幻影、霊のプレゼンスについては、人間の霊には「空間のどこかに、幻影を生み出す力」があるのではないが、「人に自らの幻影を容易にみせる作用者の特殊な能力」があるのではないかとまで考えた。これを説明するために、マイヤーズは「心霊侵入」説を超えて、「魂を離脱させること」を意味するpsychorrhagyというギリシャ語からの造語を提案したりした。これらは、「生理学的にも心理学的にも重要な(と私が信じる)事実を表現」する、「きわめて変化しやすい性質をもったサイキカルなエレメント」で、「幻影を生み出すphantasmogenetic力」として定義され、「この幻影を生み出す効果は、(自分の)心にも他人の脳にも、直接には空間のある部分にも、発揮される」と説かれた。^(注20)

対象となった現象はすべて、テレパシーの語義拡大、解釈の運用によって説明できるものである。にもかかわらず、マイヤーズが「心霊侵入」やpsychorrhagyやphantasmogeneticということばで、心や脳ではなく、「空間のどこかに」、知覚の対象になり得るものを出現させられる、と仮説を立てたのは、「死後存続」「霊(として)の実在」およびその働きかけを信じたいという願望に加え、当時夥しく集められた「証拠」のインパクトの大きさによる。「テレパシー現象について、もっと進んだ実験をすることができ……知覚者のプレゼンスが作用者によって侵入されることである……こうした実験は、私たちの探究において最重要な局面の一つになる」などといわれるのは、この種の実験が大量になされていたからである。^(注21)

死後存続の「証拠」の性質については、心霊研究が専心した事実問題に直結することから、随所で最大の労力をもって考察され、またそれに応じて厳しく批判されてきている。そしてこの課題は、靈魂仮説とテレパシー仮説(超ESP仮説)がにらみあう隘路に入り込み、忘却され、また回帰しては隘路に迷い込む、という繰り返しが続いている。

死後存続問題あるいは靈魂問題が、「結論の出ない探究」に入り込むという指摘はそのとおりであるが、問題が論じられないこと自体の理由は何だろうか。多くの哲学的主題も同様に出口なしの隘路に直結しているが、これらは凡庸なレベルから限界的なレベルまで、倦むことなく論じられている。死後存続や靈魂の問題が論じられないのは、したがって別の理由がなければならぬ。「死者の靈魂」という考えがしばしば抵抗を受けるのは、生きている人間の「自由

意志と自律性の概念を脅かす」ように見えるからであろうという指摘どおり、この抑圧は、生者の自己防衛によるものと考えてよいのだろうか。^(注22)

おわりに 死後存続説の含意

死後存続の「証明」に科学を道具として用いようとした心霊研究の試みについて、「マイヤーズほどこの問題に対して精力を傾け、成功を深く確信した者はいなかった」「信じたいという心」への屈服の罪を問われる心霊研究者がいるとすれば、それはまさにマイヤーズである」という、手厳しいマイヤーズ批判がある。マイヤーズ晩年の思想については、「科学法則の一つとみなすに到った」テレパシーをはじめとする「高度に柔軟性のある原理」によって、「東洋の宗教、ネオ・プラトン主義」などの「太古の智慧」「形而上学」「神秘学」を科学につなぎあわせたものだ、とも批判される。一般論として、心霊研究は「経験上の証拠や論理の記述によって完全に立証できないもの」を求めているという批判は、逆から言い換えると、「むしろそれは、証拠を得ることは不可能であるとする体系」ともいわれるように、あえて選択された信念としても、主張できる。このように、死後存続説の主張者もその批判者もどちらも、まずは経験的な証拠や論理的な立証を要求しており、それが得られない段階で、どちらも倫理的・世界観的な決断主義に切り替わる。であれば、途中のプロセスをきりつめると、求められているのは証拠や立証の妥当性ではなく、倫理的な決断や世界観の妥当性になるだろう。「物質科学が支持も却下もできないような」「結論の出ない探究」に、「驚くべき時間と努力」が費やされたのは、「宗教」上の慰め、「倫理」に別の基盤を捜し求めていることであった。それは宇宙観の選択の問題であり、「不死の希望があれば苦痛に満ちた人生が耐え得るものになる」という「人間の魂の要求」だといわれているとおりである。「マイヤーズは論難しやすい」という批判は、このような世界観・宇宙観の選択という決断レベルでは、ほとんど意味をなさない。^(注23)

死後存続説の信仰的、倫理的含意に注目すれば、膨大な心霊研究とその批判の双方の材料が、科学的立証のためには不毛なこと、ただし間接的には、倫理的決断のための材料を提供すること、などが浮き彫りになる。そしてマイヤーズがそうであったように、二つの代替理論の間に宙吊りになった人間にとっては、事例報告のリアリティ、インテンシティの強弱が、実感を左右するのであり、それによってそれぞれの「願望」は「確信」となったのである。

(46)マイヤーズ問題 - 近代スピリチュアリズムと心靈研究の間で - (津城)

注

- (1) 金森誠也編訳『靈界と哲学の対話 カントとスヴェーデンボリ』評論社、1991年。
- (2) 『ショーペンハウアー全集』第11巻、白水社、1973年。
- (3) マイヤーズの記述が最もまとまっているのは、心靈科学協会の創設に関わったマイヤーズ、シジウィック、ガーニーらを扱った、超心理学者のゴールドによる、評伝である。Alan Gauld, *The Founders of Psychical Research*, Routledge & Kegan Paul, London, 1968.
- (4) アンリ・エレンベルガー / 木村敏、中井久夫監訳『無意識の発見』上・下、弘文堂、1980年 [1970] 上・98、363、下・437頁。
- (5) William James, Myers's Service to Psychology, *PSPR*, XLII-XVII, May, 1901, pp.13-23. エレンベルガーも、マイヤーズの試みがユングの探究のさきがけになっていることを指摘している。『無意識の誕生』下・325頁。
- (6) William James, Reviews: Mr. F. W. H. Myers's "Human Personality and its Survival of Bodily Death", *PSPR*, XLVI-XVIII, June, 1903, pp.23-8. 津城寛文『<靈>の探究 近代スピリチュアリズムと宗教学』春秋社、2005年、120-2頁。
- (7) Frederic W. H. Myers, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death*, Hampton Roads Publishing Company, Inc., Charlottesville, 2001 [1903], pp. 1-2.
- (8) *Ibid.*, pp. 3-4, 346.
- (9) *Ibid.*, pp. 4-6.
- (10) *Ibid.*, p. 7.
- (11) *Ibid.*, p. xiv.
- (12) *Ibid.*, p.78.
- (13) *Ibid.*, pp. 135-6, 150.
- (14) *Ibid.*, p. 151.
- (15) *Ibid.*, pp. 46, 142, 261. 他に、*Ibid.*, pp. 7, 167,169, 170, 215, 216, 221, 232, 242, 243, 245, 246, 255-7.
- (16) *Ibid.*, p.143.
- (17) *Ibid.*, p. 13.
- (18) *Ibid.*, p. 12.
- (19) *Ibid.*, pp. 12-3.
- (20) *Ibid.*, p. 149.
- (21) *Ibid.*, pp. 163, 256.
- (22) ブライアン・イングリシ / 笠原敏雄訳『トランス 心の神秘を探る』春秋社、1994年 [1989] 15頁。
- (23) ジャネット・オッペンハイム / 和田芳久訳『英国心靈主義の抬頭 ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』工作舎、1992年 [1985]、171、173-5、186、189、211、201-3頁